

今夜もマブく!?無名くん

文学部6回 土持 遼馬

●そもそも私たちは

そもそも私たちは、藤子不二雄同好会だ。であるからには、藤子不二雄をまんべんなく同好するものとふつつ想像されるのであるが、実際はF者が多いのだ。

A先生のことを書こう、と思った。それは誌面のバランスを取るなどという大仰な意図だけでなく、単純にA先生の漫画が好きで、紹介せずに済ますのは惜しいと考えたからだ。かつFFランド、Aランドで読めないものもいい。知名度の高いとは言えぬ、なかなか話題にのぼらない作品群にも、読みでのある快作怪作が埋もれている。

今回は『無名くん』を取り上げよう。私はAプロパーでさえなく、大森林に分け入って日は浅い。しかしそれだけに、シンセンな感想をお伝えすることができるかもしれないし、できないかもしれない。

ムズカシイことは抜きにして、想いをつづりたい。ひとりでも誰かがA先生の世界に興味をもってくれたら、それでいいのだ（赤塚不二夫氏の宣伝ではない）。

●無名くんって、ナニ

『無名くん』は1971年から1976年にかけて『リイドコミック』に連載された漫画作品だ。コンビ解消前のことだから名義は藤子不二雄だが、A作品とみなしてよいだろう。内容は掲載誌にふさわしくサラリーマン社会を描き、読者の変身願望をくすぐる仕掛けとなっている。おとなしく目立たない新人サラリーマンの主人公は夜になると（時に夜じゃなくてもだが）サングラスにカツラを装着、ミステリアスな無敵の若紳士にサッソウと変身するのだ。

1977年、リイド社より単行本全2巻発売。1983年には同社より新装版も出た。この新装版がフルッテおり、第1巻のカバー・奥付に「男の顔は一つじゃない!!」第2巻同じく「今夜もマブくキメちゃうぜ!!」と、感動のコピーが踊る。1巻：変身篇、2巻：華麗篇とのサブタイトルも旧版に引き続き残っているが、表題紙に刻むのみのジミな扱い。まあ眺めるぶんには、新装版のほうがおもしろい。

●無名くんと佐木

無名くんの先輩社員たちはわりとロクデモない。主張の少ない無名くんを相当に軽んじている風情で、麻雀のカモにしたり、上司の小言を一身に引き受けてくれるハマ係と呼ぶなどやりたい放題であるが、とはいえイジメ倒すような風でもない。要する

にガサツだったり皮肉屋だったりする彼らの根本がよい印象との結びつきを拒んでいるだけで、癩に障る上から視線ではあるものの、ことさら無名くんに悪意をぶつけているわけではないし、だから無名くんも恨んじやいないのだ。これは重要なポイントである。

佐木や出羽といった彼ら連中のうち、特に強烈なキャラクター性を発揮し「もう一人の主人公」のような位置に居座っているのが佐木（ザキ）だ。名前の由来どおりキザな男だが中身が伴っておらず、貧相な事態に陥ることしばしば。容姿も性格も、林律雄作・高井研一郎画の漫画『総務部総務課山口六平太』でハバを利かせるウザさ満点の係長有馬貴臣のような…と言ったら、イメージできる人もいるだろうか。

基本的に1話4ページ刻みで進行する『無名くん』のストーリーパターンを述べると、こうだ。各話冒頭、佐木が自慢話やうわべだけ高潔なゴタクを並べて始まる。いいとこ見せようもしくはいい目を見ようとした佐木がしくじってかわいそうなことになり、そして一方変身後の無名くん（むろん佐木らは彼と冴えない新人無名くんが同一人物であることを知らない）がやることなすことキメまくってチャホヤされるまでが中間部。自分がどんなに成功体験をしたかを事実を隠し必死に語る佐木とかたわら無表情に眺める新人無名くんを映して終わり。

しかしながらこのパターンは、連載後期になるとずいぶん崩れてしまう。佐木のプライドの高さは確かに失われはしないが、取り繕うことを諦めて中庸に落ちていく様、哀感を誘う小人物のミジメさが目に付きだす。はっきり言って、この作品でアワレなのは無名くんではなくて佐木である。そんな佐木に対して変身後の無名くんがどんなアクションをとるか、日頃の横柄な態度に返報でもするのかといえば、さにあらずだ。無名くんは変身後の自分の全能感を楽しみはするが、それで個人的に佐木をいたぶったりはしない、むしろそっと助けようとさえするのである。

こうしたありようの典型が、佐木と無名くんでふたり、スナック「ミミズク」へメダマちゃんとあだ名されるかわいらしい店員を訪ねたときのエピソードだ。佐木、例によって調子に乗りまくる。「(無名くんは)女のことなんか一んにも知らないから、すこしおせえてやろう」と気味の悪い先輩風を吹かせ、メダマちゃんにチューは迫るわ、酒のツヨイところを見せようと限界を超えてがぶ飲みするわ、挙句悪酔いした彼はメダマちゃんの顔面に吐瀉物をぶちまけるという大失態を犯してしまう。いたたまれないのか、佐木、机に突っ伏して知らんふり。狸寝入りだ。「あたしの大きらいなタイプだけど、客だと思って相手してやったのにィ!!」「こんな男、どんなドブスでも相手にしないわよ!!」と容赦ない連罵を浴びせるメダマちゃん。偽りの寝息の下で嗚咽を押し殺し、涙を流す佐木。ここまできるともはや滑稽どころではなく、身にしみて切なさを覚える。常にないすばやい動きで店外へ駆け出す無名くん。30分後、ホリの深

い美人がやってきて「さあ、佐木さん！あたしのマンションへ帰りましょ……………」
／すみません、これ……………ご迷惑をかけたお代ですから……………」と優しく告げる。表ではサングラスの無名くんがタバコをふかしている。もちろん、美人は何らかの手段で無名くんが連れてきたのだろう。こうした経緯からもわかるように、実際の無名くんは「女のことなんか一んにも知らない」という状況からは反対の位置にあって、それなのにいらぬ見栄を張って自分を痛めつけてしまうという構造がまた痛々しかった。

失敗を繰り返す佐木に、無名くんは静かな、静かな同情を寄せて、救いの船を出す。けれどもそれを決して口外しない、あてつけない、恩に着せない。佐木にも、ほかの誰にも言わない。新人サラリーマンに戻って佐木を見つめる無名くんの読み取りにくい表情、その目。「あんた、あの時はあんなにダメダメだっただろ…」という呆れ・蔑みの視線ととれなくもないが、私には「見守る」意識の交ざった複雑な視線であるように思える。佐木と無名くんの関係は、佐木のほうばかりうるさい一方通行のようであり、その底に思いもよらぬあたたかみさえ感じさせる、奇妙なものだった。

●無名くんの無名

人物像を形容・象徴する一般的なことばに「くん」「さん」「ちゃん」を接尾しあたかも名前のごとく、あるいは名前そのものとして提示するやり方は別段珍しいものではない。手塚治虫の『チャッカーくん』、藤子Aの『さすらいくん』など種々の例を挙げられよう。

けれど「無名」くんとは、こうした中であってなお異色の印象をもたらす名づけだ。まさしく名前でありながら、無名なることを告げてゆくその自己言及、自家撞着的なひびきゆえだろうか。作中はじめの頃、「無名」と名指しされる主人公の姿がわずかに見られるものの（本名かあだ名かは不明）、ほとんどの場合「おまえ」「あいつ」「あの男」で済まされている。看板だけでなく、本当に無名なのである。興味深いのは、バッチリ変身した後の無名くんも「あなた」としか呼ばれないことだ。サラリーマンとしての人生と分離するためだけなら、理屈の上では、どこの誰とも知れぬ謎の黒メガネを演じる必要などない。名前を持った何者かになってしまってもよいのである。もちろん現実的に考えれば、夜の黒メガネは謎を謎のまま纏うことで、昼の生活に関わる疑問をシャットアウトし、超俗して軽やかに動けるわけだけでも。

実のところ、かかる無名性はより深層でこの作品を規定しているように見える。というのは、昼間の彼もそれはそれなりにサラリーマン生活を謳歌している節があるからだ。無名くんは、無名であることの楽しみを最大限に遊ぶ。「開放」の楽しみは夜の無名くんによく配分されているかもしれないが、「秘密」を楽しむことにかけては同様

なのだ。第一彼の口数は、サングラスをかけたところでちっとも増えない。風通しよく、無名のままに一貫する彼は、意外と自我意識の目くるめく振幅を味わっていないのではないか。

落ち着いた、高い視点から二つの生活を「楽しみ分ける」無名くん。このような作品を読むとき、変身という要素に目を奪われがちだが、変身の裏と表を蝶番でつなげる変わらない部分に心を寄せていくこともまた一興かと思う。謎多き超人としてふるまう快楽は後述の『オヤジ坊太郎』や『ミス・ドラキュラ』でも描かれているが、「謎」のエッセンスを扉を越えたこちら側にまで持ち込んだ点において『無名くん』は唯一無二であった。

●変身三部作

『無名くん』とあわせ読んでおきたい A 先生の変身テーマ作品に『オヤジ坊太郎』（連載 1975-76）と『ミス・ドラキュラ』（連載 1975-80）があり、ファンの間では「変身三部作」と称したりする。

『オヤジ〜』ははげでチョビひげの小学生が髪も上背も豊かな権力バツグンの富豪に変身する話、『ミス〜』は無愛想で目つきのきついハイミス OL が実は金持ちで超やり手の心優しきブロンド美女でしたという話だ。

サングラスとカツラでキメちゃう無名くんに対し、反対に眼鏡とカツラを外すことでスーパーレディとなるミス・ドラキュラ、坊太郎はひげが消えるかわりに髪の毛が伸びてくるプラマイゼロの自家発電方式(?)…と変身パターンが三者三様はっきり分かれている点、興味をそそる。さらに三人の「正体」の軸足を検討すると、無名くんはあくまでサラリーマンが常態、ミス・ドラキュラがアイデンティティのありかをブロンド美女に置く一方、坊太郎はオヤジ顔小学生とマッちょ黒幕マンの双方に精神・実生活上の基盤を認められるといった具合に、変身パターンとの照応関係を見て取れるのだ。主人公の二つの顔がそれぞれ成人男性同士、成人女性同士、子供及び大人とこれまたきれいな対応をなすことは指摘するまでもなからう。

佐木や出羽などの登場人物は多少名前や容貌を変えつつ同級生や同僚の役でいずれの作品にもレギュラー出演しており、これも三部作を鑑賞する上で手がかりとなる。また『笑ゥせえるすまん』でおなじみ「魔の巣」のマスター（『無名くん』）や『忍者ハットリくん』のハットリくん（『オヤジ坊太郎』）、『怪物くん』のフランケン（『ミス・ドラキュラ』）など他作品のキャラクターが各々役をもらって姿を見せるのもファン得だろう。ハットリくんに至っては赤塚キャラを思わせるノリで、くるくるほっぺは健在ながら小池さんパーマにビン底メガネ、エリート意識丸出しのエキセントリック高慢ちき野郎という、あの忍者少年とは似ても似つかぬ無茶苦茶っぷり、必見である。

これら越境キャラクターの存在を物語の舞台が通じ合っていることの現れとみなすか、スターシステムの結果とみなすか、解釈はさまざま考えられるし、ケースバイケースでもあるだろう。ともかく、A 漫画を一部でも知っている人は、ぜひほかの作品にも手を出してみるといい。幸せになれるから。

幸せになったところで、ごきげんよう。

お読みいただきありがとうございます。ム！